

論文の内容の要旨

東アジア近代科学啓蒙思想の形成と展開

——福沢諭吉から陳独秀まで——

学生氏名 周 程
指導教官 佐々木 力教授

近代社会への移行期において、西ヨーロッパ各国で行われた啓蒙運動は現れ方に一定の違いがあるにもかかわらず、理性・科学を唱えて宗教的蒙昧主義に反対し、自由・民主を唱えて封建的専制主義に反対するという点で一致していた。したがって、われわれが科学と民主を提唱することを西欧啓蒙の真髄と見なしてもいい。啓蒙運動は真っ先に西ヨーロッパで現れたが、それは西ヨーロッパの特有の現象ではない。東アジアでも同様に封建社会からブルジョア社会へ移行する際に、理性・科学と自由・民主を唱え、因襲・迷信と封建・専制に反対する啓蒙思潮が興った。例えば日本の場合、幕末から明治初期にかけてそれが見られた。とくに明六社に参加した人たちによって展開された思想は基本的に啓蒙思想の性格を備えていた。中国では、清末から民国初期にかけて、啓蒙思想の展開を見ることができるとくに民国初期『新青年』を中心に結成されたグループが推し進めた新文化運動は、しばしば啓蒙運動と称される。しかし、東アジアの啓蒙思想は、ある程度、西ヨーロッパの啓蒙思想と同様な内容を持つとはいえ、そのおかれた歴史的・文化的な条件が異っていたため、西ヨーロッパの啓蒙に見られないさまざまな問題を抱えており、西ヨーロッパの啓蒙と異なったさまざまな様相を帯びたわけである。しかも、東アジア内部でも、とくに日本と中国との間で社会構造や、文化風土などが同様ではないから、日中両国の啓蒙思想が現れた特徴はかなり違う。これまで、日本、あるいは中国の啓蒙思想を取り上げる研究はすでに数多く出ているが、東アジアを一つの全体としてその啓蒙思想を浮き彫りにするものはまだ多くはない。そこで、私はは日中両国の代表的な啓蒙思想家福沢諭吉と陳独秀を選んで彼らの思想を究明することを通じて、東アジアにおける啓蒙思想、とくに近代科学にかかわる啓蒙思想の形成およびその主な特徴の解明の一助としたいと考える。全文は序論と六章から構成している。前三章は福沢諭吉の科学啓蒙思想を研究対象とする。第四章は、第一のアヘン戦争から新文化運動期にかけて中国の思想界の変動を描くものである。第五、六章は陳独秀の科学啓蒙思想を扱う。終章はまとめである。序論及び各章の主な意図は次の通りである。

「序論」は本研究の準備作業に充てられている。東アジア啓蒙思想の研究の必要性及び本研究の問題設定をそこで示した。そして本研究の方法にも触れた。歴史研究に実証的方法が必要になる一方で、解釈的理解も不可欠である。つまり、歴史研究は史料の整理と事実の考証に終始してはならない。それをもたらした思想的社会的深層構造をも考察すべきなのである。また歴史研究の目的はたんに過去の事実の発掘にあるのではなく、現在の問題の解決にある。本研究ではこの方法が意識的に応用された。

「第一章 福沢諭吉における啓蒙理念の形成」では、福沢がなぜ幕末維新初年において啓蒙の決意を固めたのか、あるいは福沢の啓蒙思想の根底をなす啓蒙理念がどのように形成したのかを考察した。

「第二章 福沢諭吉における科学啓蒙思想の展開」では、主として明治初期における福沢自身の儒学と科学に関する論述に基づいて、旧来の学問に対する批判と新しい学問の唱道についての実像を再構成しようと試みる。

「第三章 福沢諭吉における科学啓蒙思想の転回」では、主に明治十年代に入ってから、福沢がしだいに啓蒙路線から離れて、ついに科学帝国主義者と宗教利用論者になる思想の変化過程を明らかにしたいと思う。

「第四章 清末における近代社会への思想変動」は、主としてアヘン戦争の敗北から辛亥革命まで、中国の思想変動はどのように展開したのかを描くものである。この章で鄭観応、康有為、張之洞、嚴復、梁啓超などの19世紀の中国思想家の思想に触れた。

「第五章 陳独秀における「民主」と「科学」——新文化運動期を中心に——」では、主として「民主」と「科学」というスローガンがどのように提起されたのか、また新文化運動期において、陳独秀がどのように進化論をもって「デモクラシー」を提唱し、「サイエンス」をもって宗教と迷信を批判したのかを論議したい。

1920年代、中国で「科学と人生観」論争が行われた。この論争の中で、陳独秀はどのように科学の旗を守っていたのか。また、その後、反封建主義と反帝国主義の闘争のなかで陳独秀はどのように根元的な民主主義を堅持し続けたのか。「第六章 陳独秀における啓蒙思想の深化と発展——「科学と人生観論争」期を中心に——」では、主にそれらの問題に答えた。

以上の考察を通じて、われわれが次のようなことがわかった。啓蒙路線から大きく逸脱した福沢諭吉と異なり、陳独秀は自分が民国初期に形成した、「サイエンス先生」と「デモクラシー先生」によって「中国の政治・道徳・学問・思想上のすべての暗黒」を癒すという理念を終始堅持し続けていた。それのみならず、後に彼はいつそその内容を充実・発展させた。それは、福沢諭吉を始めとする日本啓蒙思想家より凡そ半世紀遅れて登場した賜物であるといえるかもしれない一方で、近代中国思想が必ずしも日本の近代啓蒙思想に全面的にひけをとるものではないことをも明確に示している。陳独秀は主権が帰すべきところとして「民主」をとらえ、蒙昧主義に対抗する精神の刃として科学的批判精神を強調した。だが不幸なことに、それらは後にさまざまな原因によって中国で十分に理解・重視されなかった。最後には、文化大革命のような、専制主義とアナキズム、蒙昧主義と科学主義が混合して一体になる奇形胎児が生まれてしまう結果になった。

「ポストモダン」思想のはびこる現代世界、とりわけ日本では、科学・理性・自由・平等などのスローガンを大声で唱える啓蒙思想家たちの理念は時代遅れであるかのごとく見なされている。しかし、そういった議論を行う者の多くは、「科学」をごく一般的に否定的に見ることによって批判的精神を喪失してしまい、権威とドグマに抗する精神を冷笑する態度において、啓蒙時代以前の思想水準に帰ってしまっているように思われる。「民主」という理念がけっして時代遅れになっていないのと同様、啓蒙思想家たちに高く掲げられたような「科学」の精神は、いまも生きている。とくに中国では生き続けるべきである。それは、かなりの程度、日本でも同じではないであろうか、という思いが筆者の心をよぎる。